慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南海蠻夷小論
Sub Title	
Author	移川, 子之藏(Utsurikawa, Nenozo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.143(304)- 151(312)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南海蠻夷小論

佛領印度の稅關船 Bonite 號と云ふに便乘、朧月夜に黑く聳ゆる伽藍、尖塔を眺めつゝ暹羅の都、盤谷を後に滿潮時の湄南河を下つたのは、想起すれば大正八年二月十一日丁度紀元節の夜であつた、船が漣すら立たぬ樣な至極長閑なる暹羅や東蒲塞の沿岸を航海中、徒然の折に讀む樣にとて、新架坡の知人が貸して呉れた新村博士の「南蠻記」及原博士の「南海一見」と云ふを取出して甲板の椅子に靠れて讀んだ事があつたが其中（南海一見）に『交趾支那の南端を廻つた船は翌朝胡椒の產地として有名なホンチョンに寄港し正午頃には其西北なるフコック島に着いた、此島までは交趾支那の行政區域で、これから先きが東蒲塞である、十七世紀頃洋人の手に成り我邦の航海者に使用せられ今は予の所有に歸して居る東南亞細亞の海圖には此邊の島の一ッに片假名でイモシマといふ名を書き入れて居る、此イモシマが果してフコックであるかどうか分らぬが暹羅灣の島に勝手な命名をしたと云ふ事のみで以て當時の日本人が如何に此方面に發展して居つたかゞ偲ばれる』と云ふ事が書かれて有つたが至極面白いと思つた。波浪荒かつたコンドル島を廻つては海賊の根城であつた往時を追想したり、安南彭湃より船出して順化、會安なぞの沖合を通つては明和、寛政の頃奥州小名濱や名取なぞの船頭が永い漂蕩の末、此邊の海岸に着いた漂流談、さては沱灘（茶麟）の日本町の話なぞ念頭に浮んで來るのであつたが、今に尙ほ懷しく忘れ難い感を持て居る。

自ら見聞し、讀みもし又考もせし直接關接に支那や日本の史實に交渉ある此等南海諸國の事共に就て、何れ後日再び稿を更めて書いて見樣かと思つて居る。今は唯其前提として、纒綿たる細かい史的關係を一切離れ、廣き人類學の見地より此等南海の人種に就て、極めて概括的に述べて見樣と思ふ。

臺灣以南、即ち東印度諸島方面は世に所謂馬來の國である。乍併、何れの國土にありても先住民族の存在を見るもので此處にも又馬來人以外尙ほ三四の先住民族が居る。文化程度の最も低き劣等種族は離れ島嶼に殘存するか又はより程度の高き種族の爲めに山の奥とか、不毛の地に追はれ、最も優秀なるもの豐饒なる平地を占むるもので種族相繼げる樣、恰も波痕の磯邊に殘る如きものである。

南海にありて沿海平地に居住するは主として吾々日本人に似て身長稍々高く、短頭にして皮膚の色、濃褐色、頭髮黑く、眼窩凹みて眼鋭く、性慓悍なる馬來種族である。交通不便なる離れたる島嶼、又は山地には比較的他より影響を受けざる原馬來型の種族も居れば、又馬來に非ずと考へらるゝ長頭、若くは中頭にして、外毗白晳人の如く、頭髮は黑く概ね直毛なれども時に波狀をなし、身長低く、中には鼻幅廣くして低きものも往々混ずれども身長高き者も居る、此等馬來ならざる人種を馬來と區別して英人ローガン氏が彼等をばインドネシアンと命名したのである、以來インドネシアンなる語は普く使用さるゝに至つたのであるが、或一派の學者は彼等インドネシアンも等しく是れ馬來にして兩者相異なれるものに非ずと云ふ、然るに他の一派は彼等をポリネシヤ種族と同じく高加索系統の一分派なりとす。インドネシアン問題は今尙ほ學者間に未解決の問題にして遽に斷定し得ざるものがある。凡そ如何なる種族にありても純

粹なるものは殆んど無かるべく、大抵は他種族との混淆が行はれて居るものである。他種族との接觸の度が多ければ多き丈け混淆の度が隨て多い譯である。濠州の土人は比較的一樣の體型を以つて居るとせられ居るが、要するに永年一定の地方に棲み、他種族との接觸の度も比較的少く混淆をも免れ得たるが爲であると思はれるのである。爰にインドネシアンと總稱すれど決して單純なるものでは無く、可成に複雜なものなる事を記憶せねば成らない。

インドネシアン即ち高加索系也との說を持する學者間にありても、如何なる部族が即ちインドネシアンに屬すべきものなるかに就て、又彼等の見解が一樣で無い。けれどもインドネシアンと考へられたる部族、並に考へ得るかと思はるゝ部族名を參考の爲め左に列擧すれば、例へばスマトラ(蘇門答臘)島にありては北部山中のバタ族、及び同島西海岸島嶼中ネアス・エンガノー・メンタウヰー等の島人がインドネシアンにして、特にメンタウヰー島人はポリネシア人に髣髴たるものがあると云ふ。瓜哇島にありては東部パスルアン州トサリのテンガロア。英領ボルネオ(般島)島にありてはヅサン・ムラット・ブキッツ・カラビッツ・シボップなぞ云ふ所謂カラマンタン族、ケニヤ・マダングなぞのケニヤ族、山地のダイヤー族。蘭領ボルネオにありてはバラワンなぞのカラマンタン族、マロウ族及ウル・アイヤー族。マラッカ(摩鹿加)群島にありてはセラム(西蘭)島人、テナルテ(德拿)島人。サンダ(巽他)群島にありてはサンバワ、及テモル島人。比律賓群島にありては北呂宋島のアパヤオ・イフガオ・イゴロット・テンギアン族及ガダング族の一部。パラワン島の北部タグバヌア人。サマール島サマール人、南部ミンダナオ島のマンダヤ・バゴボ・クラマン族等

である。

臺灣の生蕃中には此インドネシアン並に原馬來の分子が多量に含まれて居る事は炳焉であり、延では我日本迄も及んで居る事と考へらるゝのである。

以上述べたる馬來、並に原馬來、及インドネシアン以外、全く相異なれる、ニグリトと呼べる第三の人種が居る。矮小黑人にして、身長五尺未滿短頭又は中頭にして眼凹み大きく、鼻短くして下部廣く、頭髮黑くして縺れ羊毛の如き人種である。馬來半島の中部山中に住せるセマング族及比律賓群島中北呂宋アパヤオ・カヾヤン・バタアン諸州及イロコス・ザンバール兩州の山地、呂宋の東海岸北端より南ルシナ迄、南部呂宋はタヤバス・カマリネス・アルベイ州等の山中に散在し、パラワン島北部の所謂バタ族、並にミンダナオ島スリガオのマ、ヌア・アイタ族も又ニグリト人種に屬す

べきものとせられて居るのである。

茲に第四の人種として加へたきは、印度錫蘭島の山中に餘喘を保つて居る極めて原始的なヴヰダの如き體型を具へたる種族にて、身長低く（五尺一寸位）長頭若くは中頭にして突顎、眼凹みて大きく皮膚の色、暗褐色、頭髮波狀又は縮れて長く且つ黑く、鼻幅廣いので一見ヴヰダ人、又は濠州土人を聯想せしむるのであるが此人種はセレベス（西里百）島の西南部に住するトアラ族、及び馬來半島のサカイ（又はセノイとも呼ぶ）として知られ居る種族それである。

體質上より見れば東印度諸島の住民は概略以上の四人種に大別出來るかと思はれるのである。而してヴヰダ型のサカイ及トアラとニグリト及びセーマングは一番文明の風の及ばざる深山幽谷に居り、インドネシアン、及原馬來之れに次ぎ、所謂馬來なるもの沿海平地に居る。此三段の地理的分

布は抑々何を物語るだらふ乎。

ヴヰダ型の人種は是れをニグリトと原馬來との混血に依りて生じたる一種族なるかの如き觀を呈するのであり、又如く考へたいのであるけれども彼等の頭形が斯る說の成立を許さない、ニグリト及セーマングは主として短頭であり、原馬來も又然りである、短頭と短頭とより長頭の生ずる事は考へられない。此ヴヰダ型種族に就ては前にも言及せし如く、原始的なる濠州土人とも似通ひる點を有せるのみならず佛領印度支那山中の蠻人中にも屢々類型を認むるものであり、錫蘭のヴヰダは印度に於ける最古の人種であるから、トアラの如き種族が偶々東印度諸島、並に東南亞細亞の一角に占居するの事實は只ニグリトと原馬來の混血に基くと云ふより、寧ろ人種誌上より見て、深く有意義なる古き古き人種の殘影を傳ふるものではないか如何。余嘗て、瓜哇旅行の折バタビヤ市よりバンドンへの途上山中にて同種の體型を具有せる一團を目擊せし事ありしが、時間の都合にて調査し得ざりしを、今尙殘念に思居れど瓜哇にも此種の人種が潛在せぬとも限らないのである。勿論ニグリト及其他の人種の影響を受けた事であらふ。ヴヰタや濠州の土人は原高加索人種の先驅であり、遠祖であらふ、我國のアイヌも又遠緣を持て居ると思ひたいのである、又此處に高加索系の一分派であるとせらるゝインドネシアン種族を見出すのも、假令それが東印度諸島に於て發生せるものに非ずとしても、尙且つ其間に脈絡の相通ずるものある事を阻却してはならないと思ふ。乍併、此問題は輕々に論じ去るを許さない。幾多の推敲を經て始めて確定し得べき大問題である。

次に考ふべきはニグリト問題である。ニグリトの存在は獨り東印度諸島のみに限らない。蘭領ニユギニア島（巴布亞）にも殘存し、印度洋上アンダ

マン島（安大滿）にも居り、亞弗利加大陸の中部にも類緣の人種が居ると云ふ事、並に深山奥地に占據する等の事實より察し、且つはアンダマン島にありて可成に古き石器時代の遺跡がニグリトのものであると云ふ樣な事實に照し考ふれば彼等も又極めて古くより廣く當方面に擴がり居りしものであると考ふる事が出來る、前にも述べたるが如く、ヴヰタ又は濠洲土人型の人種が最も古くして東印度諸島一帶に居つたのであらふ、然るにニグリトが西方より楔を入れ彼等の地域を侵し、彼等の或者は亡され、驅逐さるゝ處となり、又或者は吸收され混淆されて原型を失へ、僅かに錫蘭と濠州に殘映を止むる狀態に至つたのでは無いか。今此れを人種體型の上より考へ、地理的分布、及文化方面より見て、牽强附會の臆說と斷ずる事は出來ないと思ふ、ニグリト人種の弓矢を持てるに反し、濠州土人、錫蘭ヴヰダの間にありては弓矢の形跡を認られないと云ふ一事も、此問題を考察する上に於て、決して見逃してはならぬ事實と思ふのである。

第三に考度いのはインドネシアン種族の出現であるが、ヴヰダ型人種は高加索系統の先驅であり遠祖であると考へ、インドネシアンは高加索系の一分派とするならば自ら其間に聯關はある、余も又如く考へ度いのであるが、今假りに懷疑的見地に立つて、彼等インドネシアンと稱するも所詮は波斯、印度、亞刺比人、降ては葡萄牙、西班牙、和蘭、英國人の如き近世に於ける高加索人と土人との混血に依て生れたるものには非ざるか否か。斯る懷疑說を容認し得るの餘地ありや否や、一應簡單に考へて見度い。此種の混血の起り得る事は西曆一七九〇年、英船バウンティー號の背反水夫の一團が南太平洋中のピトケーン島に殖民せるの事實若くは我小笠原島に於ける英米、葡萄の歸化人、

我南洋に於ける獨逸系の混血兒等に徴するも明かであるからインドネシアン種族も斯くの如くして現はれたるものであらうか。如何。斯る人種混淆は必ず行はれた事であるに相違はない、而して、それがメンデル式遺傳の法則によりて傳はらうと傳はるまいと、兎に角、此等高加索人種の血を受けたものゝ其間に存在する事丈けは否定する事は出來ない、乍併インドネシアン全體が彼等との混淆によりて生れたものと成すのは短見に過ぎると思ふ。西歐人の南海到來は申迄も無く、新しき事實で四百年を出でない、波斯、印度、亞剌比人は可成に古い歴史を南海に遺して居るから寧ろ問題は後者にある、彼等の血が南海蠻夷の中に潜在して居る事を認むる點に於て、決して吝嗇なる者ではない、されど總てを、それに依て說明し終らうと云ふのは不可能の事であらう。此種の研究にはインドネシアンそれ自身の精密なる內部的、並に周圍關係の外部的二方面よりの研究が必要である事は申迄も無いけれ共、本誌及本論の性質上、大體論にとゞめ、精細なる專問的記述は一切省いて置く。只爰に考ふべきは東部太平洋上のポリネシヤ群島住民か高加索系統の一分派であり、隨てインドネシアンとは自ら關係があり、亞細亞大陸にありては緬甸のカチアリ・カーレン・ワ・モン等の諸族、印度の東部アッサム(阿薩密)地方にありてはナガ・ペーカイ・ルシヤイ・カシ・ガロー等の諸族、西藏の南方山地に於けるバルチ・ラダキ・カッチン族等より、遙南方なる安南、老撾山地の猺人、藍人(占城人、狡人極めて馬來化したれ共)東蒲塞人、(即ちクメール人、支那南北朝頃の所謂眞臘人)或は支那西南部の玀々(猓玀、猓々)の如き西藏、緬甸系南方蒙古人種(黃色人種)の間に介在してインドネシアンの系統を持するものと考へられて居る事である。此等の諸種族は素、プ

ラマプトラ河（雅魯藏布江）附近より或者はイラワデー（伊拉瓦第）、サルウイン（潞江）河に沿ひ或者は暹南、瀾滄江をたどり又或者は楊子江方面と云ふ樣に、此等の諸大河に沿ふて南下せるものであらう。而してインドネシアンは彼等の延長であると考ふる事が妥當では無いだらう乎。此等種族間には又言語上の連絡がある事も墺國人シュミット氏の研究によりて略察知する事が出來ると思ふ。

インドネシアンの南海渡來は、ポリネシヤ人の歴史が比較的新しきものなるより推して、非常に太古の事實ではあるまい、是をニグリトやヴェダ型人種の時代に較ぶれば非常なる時の隔があるものと見ねば成らぬ。

第四には原馬來及近代の所謂馬來の問題である。馬來人も細別すれば數種に分たれやう、廣義に於て馬來と云へばスマトラ、馬來半島、ボルネオ、セレベス諸島の沿海地に住する住民、比律賓人と呼び、瓜哇人と稱する者も又等しく馬來である、元來彼等は航海の術に長じ轉々として、島より島へと渡り、嘗ては西方マダカスカルより、東は太平洋の只中迄も足跡を印し、北は交趾支那、東蒲塞、暹羅の沿海地方にも今猶散在して居るから、馬來の住居せる地域は極めて廣大である。隨て馬來種族間の文化程度には原始的のものより文明化せるものなど可成の等差がある、狹義の所謂馬來人なるものは十二世紀頃スマトラ島メナングカボーに起り、回々教を奉じて興隆し、南海諸島に擴がれる馬來を指すのである、西紀一三六〇年首領サング、ニラ、ウタマに率ひられて新架坡に移住せしものも此一派の馬來である、降ては馬來半島パーハング・ジョホール・ペラック・ネグリ、センビラン諸州に殖民せるも又此馬來であり、十四世紀の末葉比律賓南部ズルー島に回々教王朝を

建設せるも又此馬來である。馬來に

"Hujan mas perak—negeri orang;
hujan keris lembing—negeri kita"

『外國に黃金の雨は降るとても
內に劍の雨が降るとても
母國に優る所やは』。

と云ふ諺があるが、彼等の歷史を知る者にとりては、此「母國」なる語が言ひ知れぬ感慨を喚び起す、乍併、馬來も又同じ人間である。馬來發祥の地に就ては適確には云ひ難いけれ共、東南亞細亞である事丈けは云ひ得やうかと思ふ。或人は南方支那と云ひ、或者は印度なりと云ふ、印度文化の影響を受けたる事至大なるは明であつても印度が彼等の發祥地であるとは云ひ得ない。南方支那が彼等の原住地なりとの說も適確なる論據のある譯ではない、只馬來も又南方蒙古人種系統に屬すと云ふに過ぎない。體質よりのみ論ずれば馬來人はタイ族、即ち暹羅人に一番密接の關係を持て居る樣に考へられるのである。不自然の物を喩へる暹羅の俚諺の中に

"T'ai cek, chek dam, mon khao, lao yai."

『倭少タイ人●淺黑き支那人●色白のモン人●
背高き老撾人』

と云ふ事があると聞えて居るが、タイ人(暹羅人)は概して背が高い方である、馬來人も又同樣である。

以上述べたる四人種以外、印度、波斯、亞剌比、支那人、日本人、歐洲の各人種が侵入し來つて、南海の人種は益々複雜の度を增しつゝあるのである。

移川子之藏